

めた1羽のメスが保護された。

10月1日まで、保護飼育をおこなって、体力が回復し元気になったので放鳥した。高知県内ではまれな鳥である。

○ツバメ

普通種ではあるが台風により死亡したものと考えられるので特に記す。

高知県幡多郡大月町小才角漁協市場の岩壁にて10羽の死体を発見した。中に足環を付けたものがあった。

023 JAPAN 43341

高知県幡多事務所より環境庁に報告。

おわりに

この一連の調査で記録された鳥のうち、高知県ですでに確認例のあるものはコアジサシ(繁殖)、アジサシ、オオヨシゴイ、ツバメ(繁殖)、クロハラアジサシ(写真あり夏羽)である。ハジロクロハラアジサシ、ハシグロクロハラアジサシ、ハシブトアジサシ、アカハラダカはこれまで未記録であった。しかもクロハラアジサシ類では100羽を超える大群は珍しい記録である。

最後に鳥種の確認のために大変お世話になりました高野伸二先生に心から謝意を申し上げます。また調査等に御協力をいただいた、高知県幡多事務所林業課山下国見氏、日本野鳥の会々員田中佳氏、大野由起夫氏、岡本雄二郎氏その他関係下さった方々に心から謝意を表わします。

1983年9月7日受理。

1. 〒787 中村市東町3-3-11.

The Birds Observed after Typhoon No. 19 (1982)

Kacho Sawada¹

On 25 September 1982, after typhoon No. 19 passed, some species such as White-winged Black Tern *Sterna leucoptera*, Black Tern *S. nigra*, Whiskered Tern *S. hybrida*, Gull-billed Tern *S. nilotica* were observed along the coast of Kochi Prefecture. These species are rare in Japan.

1. 3-3-11 Higashi-machi, Nakamura-shi 787.

サンカノゴイの鳴声終日調査

菊田一朝¹

サンカノゴイ *Botaurus stellaris* は、本州においては秋冬の候にまれにみられるにすぎないが、北海道では夏鳥または留鳥としてやや多数生息している。繁殖が確認されているところは渡島支庁函館(1874)、胆振支庁苫小牧(1937, 1950)、空知支庁長沼(1930)、釧路支庁釧路(1939)、網走支庁女満別(1939)がある(清棲 1979)。1982年5月4日、苫小牧市ウトナイ沼付近でも安西英明氏によりその存在が確認され、その後も繁殖期を通して記録された。記録された場所はコナラ等の樹木の茂る低山に囲まれた約120haのアシ原で、ヤチハンノキが点在しており、その中

央には開水面がある。

サンカノゴイは1日のうちどの時間帯によく鳴くかを知る目的で、1983年6月17日18時から18日18時にかけて鳴声の終日調査を行った。現地の天候はくもりで、気象表による日の入、日の出時刻はそれぞれ19時13分、3時55分であった。調査は湿原を見わたせる標高10mの地点よりその声を聞き、回数と時間を記録し1時間ごとに集計した。図1がその結果である。鳴声は“ブオン”と聞こえるような声で、1～2秒間隔で4回程度繰り返すが、その間にそれぞれ“ウッ”という息を吸うような音を付け加える。すなわち、ウッ ブオン、ウッ ブオン、ウッ ブオン、ウッ ブオンと聞こえる。現地では2個体が確認されているが、鳴くのは常に1個体であった。鳴声は16時ごろから聞こえはじめ、日没直後の19時代には114声と急激に増加した。21時にはいとびたりと鳴き止み、23時ごろわずかに聞こえたのち2時代に184声とそのピークをむかえた。しかし、日の出後は減少し10時ごろにはときどき聞かれる程度となり、日中は全く鳴き止んでしまった。なお、18日午前中、飛翔が観察されたがいずれも同じコースの低空を飛んでいた。時間は4時59分、6時24分、7時31分、12時36分の4回で、飛翔中“ゲロツ、ゲロツ”と聞こえる声を発していた。

この24時間の調査例においては、サンカノゴイの鳴き方のパターンは夜型とみられる。しかし、さらに違った天候、時期のもとの調査も必要であろう。

この調査にあたって協力を頂いたウトナイ湖サンクチュアリ・ボランティアの国枝昭宏氏、井上徹氏、田沢道広氏に感謝したい。

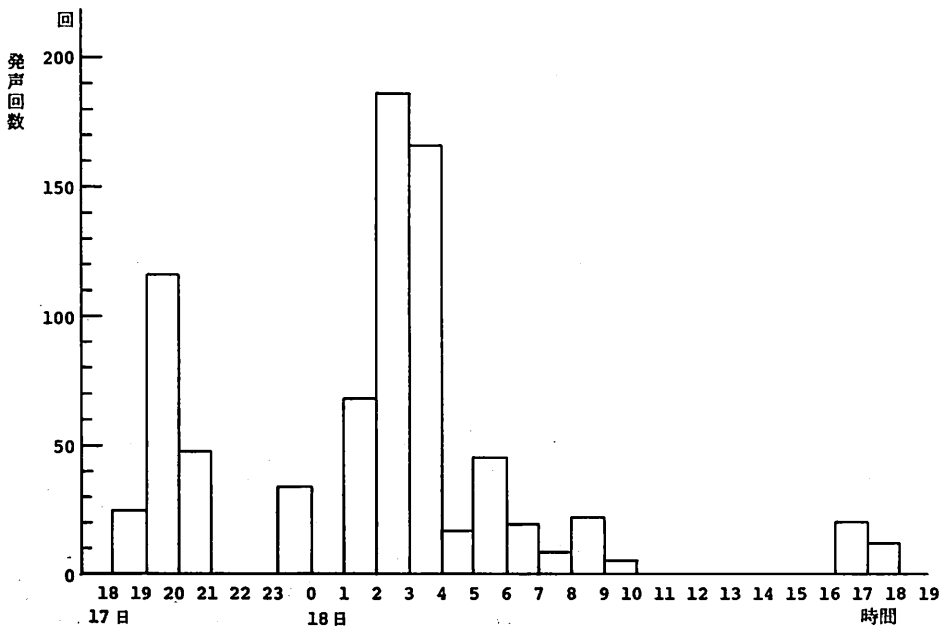


図1 各時刻におけるサンカノゴイの発声回数 (1983. 6. 17~18)

文 献

清瀬幸保 1979 日本鳥類大図鑑. 講談社.

1983年10月4日受理.

1. 〒960 福島市山口字沼田25-3

Frequency of the Bittern's Call

Ichiro Kikuta¹

The frequency of the call of Bittern *Botaurus stellaris* was examined all day on 17—18 June 1983 in a marsh near Lake Utonai. The frequency of the call was high from 19:00 to 20:00 and 2:00 to 3:00 in the night, but the voice was not heard from 10:00 to 16:00 in the daylight.

1. 25—3 Yamaguchi-aza-numata, Fukushima shi 960.

九州でのシロハラクイナの繁殖初記録

田中正一¹

九州以北では初めてと思われるシロハラクイナの繁殖を、鹿児島県串木野市で確認し、放棄された卵を採集することができたので報告する。

1. 発見までの経緯 1981年5月17日、串木野市北部の深田の水田で成鳥1羽を観察した。その後同地で5月24、30日にも成鳥1羽を観察したが、田植が始まったためか姿を消した。1982年2月27日、五反田川沿いの河内で成鳥1羽を観察した。さらに4月24日には浅山橋を挟んで2番、4羽を同時に観察し、直後に上流で別のシロハラクイナの声を聞いた。また金山川と五反田川との合流点附近で別の番と思われる羽も観察した。

2. 巣卵の発見 1982年4月23日、1羽が枯草を食い千切り、浅山橋の北岸上流3～40mの土手の草むらに運びこむ。この場所へ何回も出入りするので営巣していると思われた。そこで、営巣を妨げないために2羽がこの場所を離れた時を見はからって草むらをのぞいたところ1巢7卵を発見した。巢は地面より約30cmの草の間にあり、皿形で巢材には枯草が使われていた。その後は営巣の妨げとなることを恐れて近づかずに見守った。その後、親鳥が巢の場所へ出入りしなくなったので5月10日に再度巢をのぞいたところ、巢内で卵殻と破損した卵3個を発見した。親鳥の行動から判断して、雛がすでにフ化したか巢が放棄されたと考え、破損した卵を採集した。

3. 雛の観察 6月19日、河良橋の7～80m上流で親鳥2羽の後に付いて行動する、フ化後間もないと思われる雛3～4羽を確認した。6月23日には浅山橋の1～20m下流で親鳥1羽と雛5羽を確認した。最初の場所から7～800m離れていることと、複数の番の生息を確認していることから別の雛と思われたが確信には至らなかった。しかし7月11日に河良橋下流5～10mと浅山橋上流約100mで約30分の間で2組の雛を観察し、



写真1 シロハラクイナの親子 (1982.6.23)